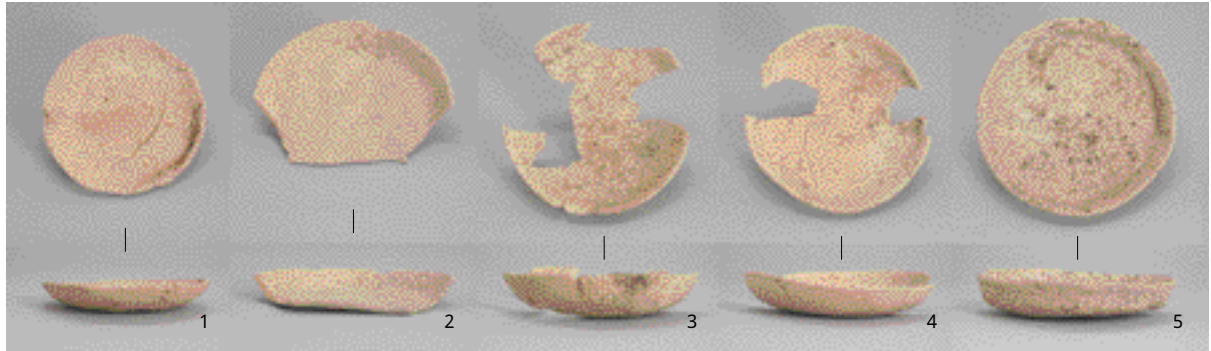


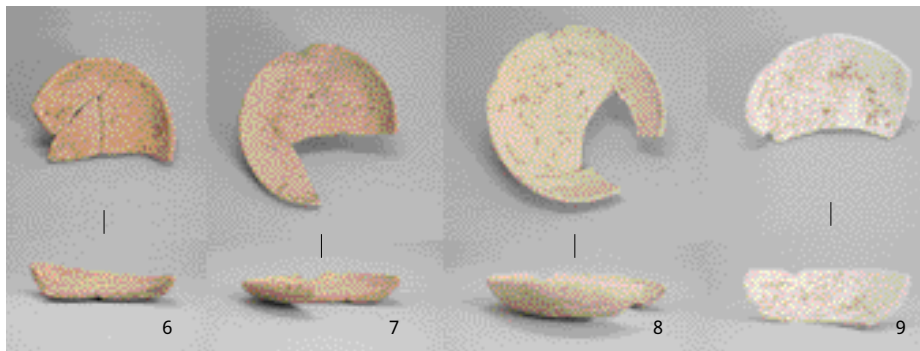
乙訓の土師器皿

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

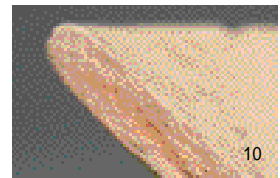
(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



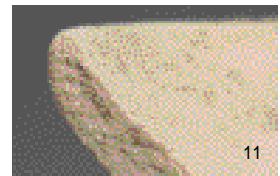
乙訓型土師器皿



京都型の土師器皿



乙訓型の口縁部断面

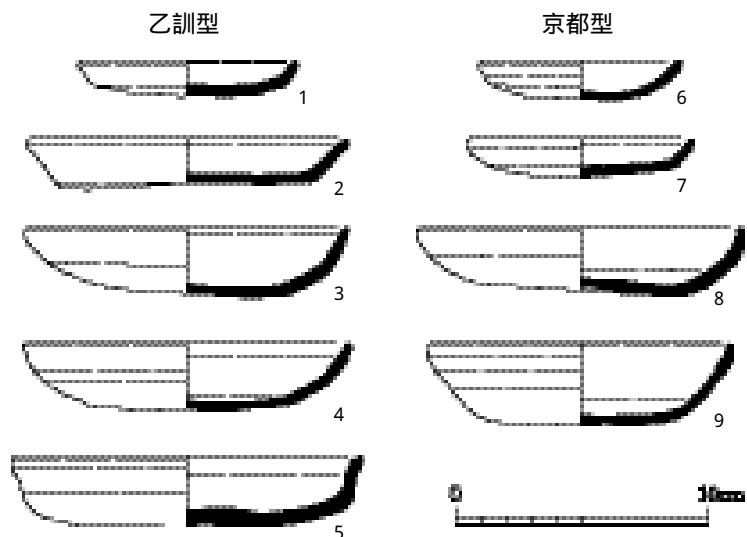


京都型の口縁部断面

はじめに 京都御苑内の東北角に京都和風迎賓館が建設されることになり、事前の発掘調査を1998年3月から2001年3月にかけて実施しました。この場所は平安京の北東隅に該当し、平安時代前期には藤原良房の邸宅「染殿」、清和上皇の後院「清和院」がおかれた場所にあたります。また調査地南東は藤原道長の建立による「法成寺」推定地でもあります。発掘調査では平安時代とそれに続く鎌倉・室町時代、さらには桃山時代から江戸時代の全期間を通じての遺構・遺物が出土し、連続的に生活跡が形成されてきた経過が明らかとなりました。このうち、鎌倉

時代の調査では、乙訓地域でよく出土する土師器皿（以下「乙訓型」とする）がまとまって出土しました。これらは京都で一般的に出土

する土師器皿（以下「京都型」とする）と比べ特徴が明確で、土器の移動を考える上で重要な資料となりました。



溝から出土した土師器皿の実測図

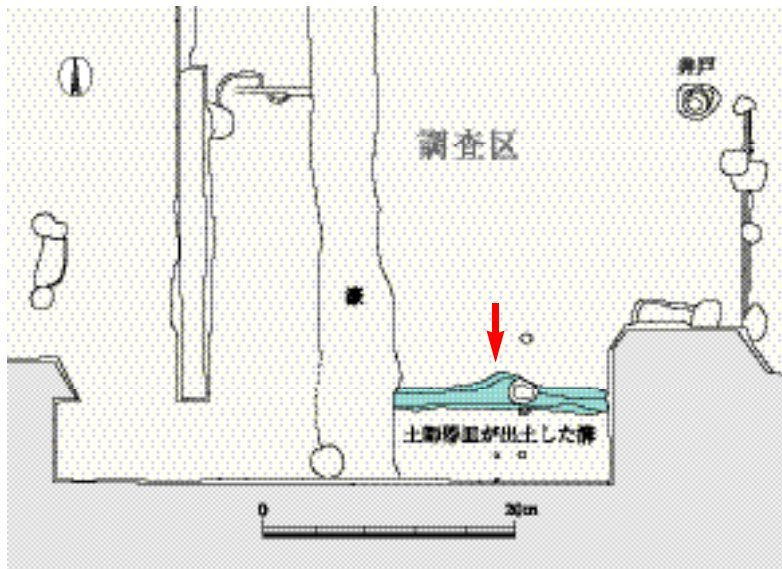
遺構について 調査地は、平安京左京北辺四坊七町に推定されています。乙訓型の土師器皿が出土した遺構は調査区の南半部で検出した鎌倉時代前期の溝です。溝は東西方向で、西側は戦国時代の南北方向の濠に削平されていました。溝の規模は幅2m、深さは0.8mあり、長さは東西約17mにわたり残っていました。溝の埋土は焼土・炭を多く含み、土師器皿・瓦器・白色土器などの土器類が多量に投棄された状態で出土しました。土師器皿では乙訓型のもので出土量の4分の3以上を占めています。

溝は、正親町小路南築地から45m南に位置しており、条坊ののりつた宅地の区画溝と考えられます。正親町小路とこの溝の間には井戸や土壇などがみられ、宅地内の施設と考えられます。

遺物について 写真および図に示した土師器皿の1～5が乙訓型で、6～9が京都型のもので、

乙訓型の土師器皿について見ていきますと、口径8cm前後の小型の皿(1)、口径12cmから14cmまでの大型の皿(2～5)があります。小型の皿と大型の皿は、底部からの立ち上がりは厚めで、口縁に向かって外反気味に薄く仕上げられています。口縁端部を断面が三角形に見えるように仕上げているものが京都型の特徴です(写真の11)。乙訓型のものの中には京都型風に仕上げているものもありますが、大半は丸くおさめています(写真の10)。3・4はこの口径のものとしては深い器形です。

京都型では、小型の皿(6・7)



矢印のある溝から土師器皿がまとめて出土した(写真は北西から)

や、深い器形の皿(8・9)が共に出土しています。これらは京都市内で普通に出土するものです。

この乙訓型土師器皿は13世紀前半から中頃の時期のもので、瓦器の椀や小皿、輸入陶磁器では青磁椀や皿が共に出土しています。この他、瓦器鍋や東播系須恵器鉢もみられました。

まとめ 溝から出土した土師器皿については、まず乙訓型のもので多数を占めることが注目されます。その中には乙訓型のコースタ

一形の皿が含まれることや、全体に丁寧な製品が多い点も注目してよいでしょう。コースター形の皿は、乙訓地域では出土が希なもので、京を意識して生産されたことがうかがえます。

これらの土師器は、乙訓の荘園から京の貴族階層に納められたものとみられます。そうしたことは、公卿の乙訓地域での荘園支配の一端を示すなど、地方物資の搬入の実態を知る上で重要な資料となるでしょう。(加納 敬二)